

新宿支店のオフィスの中でも、ひときわ笑顔が目立つ愛嬌のある男性がいた。「そこはもう少し丁寧に伝えないとお客様が納得しないよ」。部下に指示を与えているのだが、ソフトな語り口なので、言われたほうも自然と笑顔になる。なんともなごやかな雰囲気の中で業務を進めるのは多田和典さん、七十六歳。日本建築検査協会株式会社（通称JCIA）で営業を務めるベテラン社員だ。

「当社の主な業務は、建築物が法律に適合しているか検査を行ない、証明書を発行したり性能を評価したりすることです。建物の安心、安全を見極める重要な仕事なので、国土交通大臣が指定した機関しかできません。建物の価値を保証し、未来に残していくうえでも、私たちの役割は大きいんですよ」

笑顔いっぱいの多田さんは、仕事に對する自負がひしひしと伝わってくる。仕事が好きで、誇りを持っている——これが、多田さんが笑顔で現役を続けられる一番の理由だろう。

多田さんは、最初から今の仕事に就いていたわけではない。五十歳目前にしてたまたま転職したのが、今の仕事につながっているというから、人生はわからない。この業界に入る前、多田さんは建築デザイナーとして活躍していた。

「店舗やマンションの内装や外観、意匠デザインを手がけていたんです。もともと工学部出身なので理系の知識もある。技術と美術がわかるデザイナーとして、優遇されましたね。時代の先端を行く商業施設やレジャーランド、富裕層の豪邸など、やりがいがある仕事を若いときからいくつもや

## 連載

## 第22回

経験を生かして仕事を楽しんでいます。



建築確認検査会社営業専門職

た だ かず のり  
多田和典さん

## 新天地でもやりがいを見出す

取材・文：辻由美子  
写真：小池彩子

らせてもらいました」

ある有名人の自宅の内装を手がけたときは、夫人のリクエストが多く、完成まで一年かかったこともあつたそうだが、今振り

返れば、どれもこれも楽しい思い出ばかりだ。時はバブルの真っ盛り。華やかな世界

で、多田さんはまさに水を得た魚のように生き生きと仕事に励んでいた。

しかし、順風満帆の日々は永遠には続かない。五十歳になる直前、勤めていた会社の経営が思わしくなり、多田さんは転職を余儀なくされた。

転職先に選んだのは創業したばかりの若い企業だった。スタートアップで自分の経験や知見を生かしたいという思いが、多田さんをあと押しした。

仕事は建物の診断や検査が主で、華やかな建築デザインとは対極にあるようだ。堅

実さを追求するものだった。だが、意外にも多田さんはこの仕事に適性を見出していた。

「私の仕事は設計事務所やゼネコンなどに出向いて、審査や検査の仕事をもらつてくる営業でしたが、人と人との関係づくりがおもしろいんですよ。たとえば相手は百戦錬磨の設計士、こちらは審査する側の立場。いかに相手のふところに飛び込んで信頼を勝ち取るか、関係を構築するプロセスがとても楽しかったですね」

かつての仕事とは別の魅力があつたということだろう。だが、それを見出し、やりがいにえたのは多田さん自身の前向きな姿勢によるところが大きい。どんな環境であろうと、身を置いた場所でやりがいを見出していく。今を楽しく肯定的に生きる。それが多田さんの流儀であり、今なお笑顔で仕

事を続けられるゆえんである。

### 五十七歳で再び職探しの苦境に

転職した会社は時流にのつてどんどん成長していく。それまで役所がやつていた建築確認審査や検査を行なう指定業者として認定され、仕事は飛躍的に増えていった。上場しようという話もあつて、夢はふくらむばかりだった。

だが、好事魔多し。会社はある偽造事件のとばつちりを受けて、大きく信用を失墜、上場の話も立ち消えに。そればかりか経営も傾いて、多田さんは再び転職せざるを得ない状況に追い込まれてしまった。

年齢はすでに五十七歳。一般的に転職は難しい年代だったが、多田さんはめげなかつた。同じ業界の日本建築検査協会の募集



お客様との関係づくりに仕事のおもしろさを感じている

を人伝ひとづに知り、すぐに応募したところ、面接で社長の山崎哲氏やまさき てつしに出会い、それまでの職歴が評価されて採用が決まった。

「建築申請の仕事は会社対会社の契約で進みますが、『この営業担当者だからお願ひしたい』というケースも多く、人間関係



オフィスでもなごやかな雰囲気で働く

三十名が六十五歳以上の社員です。本人の希望に応じて、嘱託あるいは業務委託契約を結び、終業時間も三十分繰り上げるなど、シニアの方が働きやすい環境をつくっています。

シニアの方には若手や中堅社員のよいお手本となり、自身の経験、スキルを伝授す

ることで、組織力の向上に貢献していただきたいと考えています」

現在、多田さんに続く生涯現役社員が、次々に誕生しているという。

### いつまでも人の輪の中で働き続けたい

多田さんの会社での一日は、八時半ごろに始まる。以前もつと早く会社に来すぎて、入り口の鍵が開いておらず中に入れなかつたこともあつたそうだが、シニアが張り切りすぎても若い社員が働きにくくなる。「今はみんなと同じ時間に出社するようになります」とのこと。周囲の雰囲気も上手に溶け込むことも、生涯現役で働く鉄則である。

仕事は顧客対応なので、訪問がメインになる。「午前中に二件、午後に二件程度お

が大きな要素を占めています。そのため、営業担当者が別の会社に移ると、お客様も一緒に移ることが少なくありません。だから私の場合も、この業界で十年近いキャリアがあつて顧客を多く持っていたことが採用につながつたのではないでしようか」

人間関係をコツコツ築いてきた努力が実を結んだといえる。多田さんの採用を決めた日本建築検査協会は、その前年に設立されたばかりの若い会社だった。経験豊富な多田さんを採用したこと、人材育成や顧客獲得などに百人力を得たに違いない。

やがて定年の六十五歳を迎えたが、「会社にずっと居続けてもよさそうだったのでも、そのまま仕事を続けました」と多田さんは言う。毎年更新する契約社員であつても多田さんのモチベーションに変化はなかつた。

多田さんを採用したことで、人材育成や顧客獲得などに百人力を得たに違いない。

やがて定年の六十五歳を迎えたが、「会社にずっと居続けてもよさそうだったのでも、そのまま仕事を続けました」と多田さんは言う。毎年更新する契約社員であつても多田さんのモチベーションに変化はなかつた。

会社がシニアの雇用に理解を示していたことも大きかった。管理部執行役員の鈴木健一郎さんは日本建築検査協会の人事方針についてこう語る。

「当社はシニアの方をはじめ、さまざまな方に働いていただく多様性を経営方針に掲げています。二〇二三年には七十歳定年制を導入し、現在百十六名の社員のうち、

「そもそも定年になつたからといつて仕事をやめるつもりは全くなかつたんです。働いているほうが絶対に楽しいので。私は若いころからスポーツをやつていて、テニスで国体に出たこともあるくらいですのでも、体を使って動くのが性に合つています。

それに、私の父も七十八歳になるまで現役で仕事を続けていました。その背中を見ているので、ずっと働くのが当たり前だつたんですね」

会社がシニアの雇用に理解を示していたことも大きかった。管理部執行役員の鈴木健一郎さんは日本建築検査協会の人事方針についてこう語る。



いつまでも人から必要とされる存在であり  
続けたいと笑顔で語る

## 多田和典さんに学ぶ

### 生涯現役で働くヒント

- ① 今やっている仕事にやりがいを見出す
- ② 周囲の雰囲気に上手に溶け込む
- ③ 無理せずマイペースで仕事を進める



➡ WEB「PHPしあわせファクトリー 生涯現役で働く」では、  
今回の取材の動画などを公開しています

お客様先を回り、検査や申請の案件がないか情報を収集したり、相談に乗ったりします」。他にも法律改正があれば、それにあたっての講習会で講師役を務めたり、ゴルフコンペなどのイベントがあれば、その手伝いをしたりもする。

外回りから帰社すると、事務作業をして、退社は十七時半。遅いときは十九時ごろまで勤務する。正社員同様の業務をこなし、出社も月曜から金曜まで毎日だが、疲れることはないという。

「むしろ休みがあるとリズムが狂つて困ります。休日は体がなまらないよう、家の掃除をしたり、買い物に行つたり。連休には、娘家族と車をつらねてキャンプに行くこともありますね」

元気いっぱいの多田さんだが、生涯現役を続けるには健康も重要だ。実は多田さん

は三年前に大病を患い、長期にわたって仕事を休むという苦い経験をしている。

「無理はしていないつもりでしたが、歩くと息が苦しくなることが続いて、十分くらい歩く間に二回も三回も休まないといけない。これはおかしいと妻からも言われて、医者に行つたら心臓に問題があつたんですね」。すぐに病院で手術を受け、一ヶ月の入院となつた。

「入院生活は退屈で退屈で(笑)。一日でも早く仕事に戻りたかった。それでリハビリをやりすぎて、医者から怒られたこともあります」

退院後、すぐさま出社しようとしたが、さすがに会社から「もう半月休んでください」と止められた。復帰への思いを募らせつつ、多田さんはこのとき改めて、自分にとつての仕事の持つ意味の大きさを自覚し

たという。それからは無理をせずに、マイペースで仕事を進めている。

多田さんに「いつまで働きますか」とたずねると、「いつまでも。会社に来るなど言われても来ますよ!」と、笑顔で答えが返ってきた。仕事が生きがいであり、自分のアイデンティティーでもあるのだろう。

続けて、多田さんにとっての幸せとは何かをたずねると、少し考えて多田さんはこ

う答えた。

「人の輪の中にいること。その中で自分が培ってきた経験を人に役立ててもらうこと。そして、人から必要とされる存在になることかな」

インタビューを終えた多田さんは笑顔で職場に戻つていった。たちまち人が集まつてきて、笑い声があふれる。生涯現役で働き続ける多田さんは、仕事を愛し、仕事から愛され、周りからなくてはならない存在として大切にされる人だつた。